

ヤーコプ・ブルクハルト Jacob Burckhardt

チチェローネ
DER CICERONE

イタリア美術作品享受の案内

Eine Anleitung zum Genuss der Kunstwerke Italiens

【建築篇】



瀧内 槇雄 訳

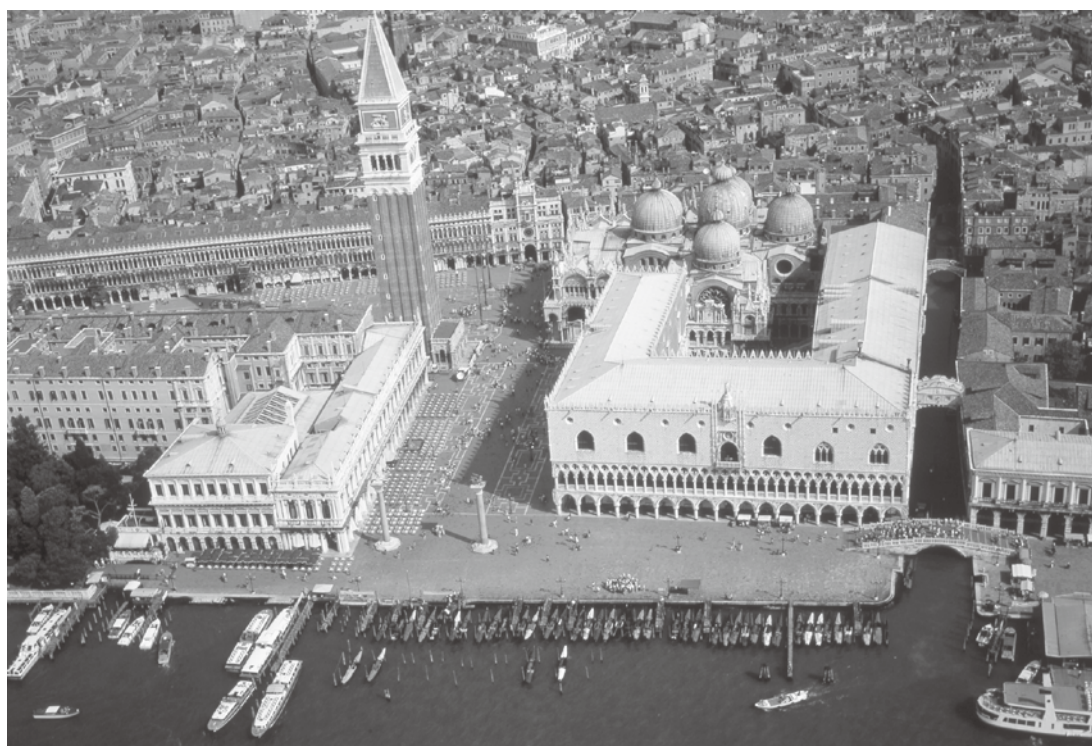
中央公論美術出版

19世紀最大の知性の一人であり、ルネサンス文化・芸術研究の大司祭と呼ばれた碩学ヤーコプ・ブルクハルト〔Jacob Burckhardt, 1818-1897〕は、スイスに生まれ、ベルリン大学でランケやケーラーに歴史学と芸術史学を学んだ。

チチェローネのイタリア旅行の後、チューリッヒ工科大学教授を経て、バーゼル大学で35年間歴史学・美術史の教授を勤めた。『イタリア・ルネサンスの文化』(1860)、『イタリア・ルネサンスの建築史』(1867)、『ルーベンス回想』(1898)、『コンスタンティヌス大帝の時代』(1853)、『ギリシア文化史』(1898-1902)、『世界史的考察』(1905)など多大な影響を与えた名著を多数著した。

本書『チチェローネ』(Der Cicerone, 1855)は、副題に「イタリア美術作品享受の案内」とあるように古代からルネサンスを経てバロックに至る建築・絵画・彫刻作品を個々にくわしく紹介しつつ同時に見事な様式史を確立し最もブルクハルト的と評される名著である。その方法論は「芸術史は芸術家の歴史ではなく、芸術の対象とその記述から出発し、芸術自体とその範疇に従う叙述を目的」とするとして、芸術史的現象を文化史として位置づけ、それ以降のすべての著作に適用して、近代芸術史学および文化史学の基礎を確立した。その影響は哲学者ニーチェをはじめ、芸術史家のヴェルフリンなどの学問的根幹に関わる。

このたびの『チチェローネ』は「建築篇」として古代よりルネサンス、バロックの近世までの全編を初訳し、つづいて順次「絵画篇」「彫刻篇」を上梓する予定である。



目 次



凡 例
献 辞 ベルリンのフランツ・ケーグラーへ
前書き

第1章 古代建築

パエストゥムの神殿／ギリシア人とローマ人の古代円柱オーダー／ローマ建築の新要素／ドーリス式、イオニア式、コリント式オーダーのローマ建築／パンテオン／その他の神殿／神殿の断片／墓碑／顕彰記念碑／オベリスク／凱旋門／門／実用建築／フォロ／バシリカ／劇場、円形闘技場、チルコ／浴場／ニュンファエウム／家屋、ヴィラ、パラッツォ／ポンペイの壁面装飾／大理石の豪華な道具／青銅製の道具／陶製の器

第2章 古代キリスト教建築

バシリカ建築の基本特徴／ローマのバシリカ／ラヴェンナのバシリカ／その他のイタリアのバシリカ／集中式建築 洗礼堂／霊廟／集中式建築の聖堂／コスマーティにいたる古代キリスト教様式の装飾

第3章 ロマネスク建築

ピーサの建築／斜めの建築と建築の非均一性／ルッカの建築／その他のトスカーナ／フィレンツェ／ジェノヴァの聖堂／ヴェネツィアの建造物／その他の北イタリア／マルケ州とウンブリア州

第4章 ゲルマン的建築

支配的北方様式の聖堂／本来のイタリア的ゲルマンの様式の聖堂／支柱の変形。ニココロ・ピサーノ／アルノルフォ／後継者／中部イタリア／ボローニャ／北イタリア／世俗建築。北イタリア／トスカーナ／ゲルマン様式の装飾

第5章 初期ルネサンスの建築

初期ルネサンスの特性／ルネサンス認識のための補助手段／ブルネレスコ／ミケロット／アルベルティ／シエナ／クローナカにいたる他のフィレンツェ人／ピーサ／ウンブリア地方など／ローマ／ナポリ／ジェノヴァ／ミラノ公国。ブラマンテの初期の建築／ピアチェンツァ、パルマ、ボローニャ、フェラーラ／ヴェネツィア、ロンバルディア人／パドヴァ／ヴィチエンツァ、ヴェローナ、プレーシア、ベルガモ

全ルネサンスの装飾

概観／石製と金属鑄造／木製装飾／豪華装飾品。ベンヴェヌート・チェルリーニの様式／マヨリカ陶器／描かれた装飾。フレスコ画の縁取りや穹窿装飾など／ラファエロのロジgia／ラファエロのその他の装飾／ラファエロの助手と弟子／末期のアラベスクとストゥッコ装飾／ファサード絵

第6章 盛期ルネサンス

建築の進歩／ブラマンテのローマ時代／建築家としてのラファエロ／ジュリオ・ローマーノ／ベルッツィ／サンガルロ／バッチョ・ダーニョロ／パドヴァ人とヴェローナ人／ヤーコポ・サンソヴィーノ／ミケランジェロ／ローマのサン・ピエトロ

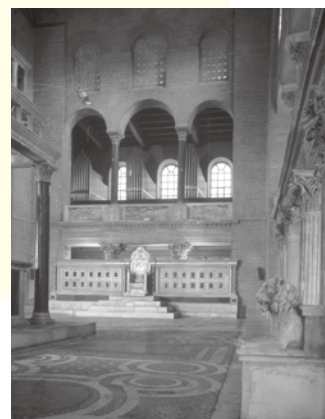
第7章 1540年から1580年までの建築

ヴィニョーラ／ヴァザーリ／アンマナーティ／その他のフィレンツェ人／ベルレグリーノとミラノ人／ジェノヴァ。ガレアツォ・アレッシとジェノヴァのパラッツォ建築／バルラーディオ

第8章 バロック様式の建築と装飾

第9章 ヴィラと庭園

訳 注
解 説 瀧内慎雄
訳者あとがき
挿図出典一覧
都市別建築作品索引



第一章 古代建築



図1-15 パンテオン ローマ

の建築物は同時にそのありかたがきわめて独特であり、こゝであら
かじめ論じておかなければならない。もともとはアグリッパにより彼
の浴場の主ホールとして建設され、後に初めて神殿に改修され柱廊を
備えるにいたったものだが、あらゆる修復や略奪後もその意外れた
効果は本質的に守つてきたものの相当な損失を伴ななかつたわけ
ではない。かつての本家の効果を明かに示すに相応しいものだけを
取り出した。

まずいま急な上り坂になっている広場はずっと低く平らに据わつ
ていたと考えよ。というのかつては五段の階段を登つて、柱廊玄
関へと通じていたのだから、現在やや勾配が急で高きように見
える坂もこのようにして初めて目に對して正しい比例関係による
破風は破風群、あるいは少なくとも大きな浮彫りで満ち、かつて
アテナイ人ディオゲネスがこの場所のために完成したのもうの形
像で飾つてみよ。ところで巨大な花崗岩の円柱は、その素材ゆゑに大部
分を蝕れなかつた。現在ながらアグスタスの時代ですらこの石材に
は取立て手をつけようとする、素材に敬意を表してこの円柱にはカネリ
ーリングがつけられた。さらに例外なくとも葉飾りが失われ
ていて柱頭から、完全に損なわれていない柱頭をもの中へ組み立て
ることを決意してみよ。なんといってもこの柱頭はこの種類のもの
で芸術が創造した最も美しいものの一つなのである。テカサス

ローマの全神廟建築、否ともその建築一般において支配的なのは、コリント式オーダーである。コリント式の形が完全な純粋さ
もって現れるのは稀であるとはいへ、コリント式、主にその柱頭を、主には過剰になるまでつぎからつぎと飾りて行くことを知っ
ていたローマ人の裝飾的衝動をしばしばわれわれは讃嘆せざるにいらぬ。彼らは柱頭の裝飾を中断し、動機、トフイー、
人像、そしてついには中世ロマネスク様式時代のようにあらゆる史話に充てて、いたこの種史話ながら柱頭はアチンシの「ニニヤ
の中庭にある。彼らは装飾の滑らかな最後のプロファイルも一連の裝飾によつて解消した（ローマディオクレティアス帝の聖地、
現在のサンタ・マリア・マジョーレ、アンジェリ。その最後は決定的な後意であり突然粗野に解れて終る。
コリント式建築オーダーの最も美しい作例がローマのあの「パンテオン」(図15)であるとはだれしも認めることである。こ

パンテオン



図1-14 サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ ローマ

もユピテル神殿の内部の円柱列をさうしてイオニア式であるが、その他はほと
んど例外なく純粋オーダーが支配的である。
もっと美しいローマ・イオニア式神殿はほとんど運び去られた断片のあの取
集の中にただなお生きつづけている。サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ
の円柱(図13)の上には優れたイオニア式柱頭がより抜かれて見出されるとこ
ろは多分はやどこにもないだろう。いくつかの柱頭はいまなおほとんどギリ
シアの迫力を備えている。その他の柱頭もヴォーユートやアバクスから溢れ
出る豊かな葉飾、奇、彫像によつて興味深い。この聖堂の梁にとりつけられ
ている多数の種々の古代の持送りや同じ建築物のものがどうも当然ながら調べようがない。美しいローマ・イオニア式柱頭はなかつてパ
ラッソー・フルネゼの表広間にある。サンタ・マリア・イン・コスタ・ディ・ソラ左側の柱頭はこのオーダーの四隅ヴォーユートの最も純粋な柱頭の
一つである。

第五章 初期キリスト教の建築



図V-6 サンタ・クロチェ 第二フロアスター フィレンツェ



図V-5 修道士養育院 柱廊 フィレンツェ

フロの壁で塗り込まれた柱廊はこれと、少なくとも前者とよく似ている。
完全な修道院中庭のうちフィレンツェのサンタ・クロチェの第二フロイ
スター(図6)は、フアントツツの先例に倣いブルネレスコの名に倣実
に加えることができると思ふ。これは完全に例々まで施されたアーチプロフ
イルと柱廊を備えダイオンの埋められたルネサンスの最も美しい中庭の
一つであり、上層は見事な修送りや欄干を備え円柱を支えられ平らな天井に覆われ
ている。——ブルネレスコがこの種の建築物の円柱に妥をせなかつたのは、
そうする全体を深く組織な関係が決定されるからであり、また多分高さが
一定に定められていたからだろう。

大コジモの豊かな勢力を身えられたブルネレスコが地方修道院参事員
居城をヴィラに改造し直したかを示
しているのが、フィレンツェから三十
分の所にあるフィエゾレの山麓の所
謂「パデリア」である。時間之余の
ない建築家はこの建物を見送るくなら
むしるフィエゾレのものを追った方
がいい。これは山の傾斜に従った平
規則な美しい個々の建築物の集合体である。
魅力的な長方形の中庭(図7)は
下の柱廊は高さを支えられ上の柱廊は
平らな天井である。南側に出て行くと



図V-7 バディア 中庭 フィエゾレ



図V-4 パッツィ一家の礼拝堂 フィレンツェ

フィレンツェのサンタ・クロチェの前方の修道院中
庭にある「パッツィ一家の礼拝堂」(図4)はルネサンス
の展開全体に對して重要な意義をもつ。ギリシア十字上
方の内意のある多角形の平らな内庭はこの形でブルネ
レスコの後継者たちのお気に入り形式となった。ジュ
リアーノ・ダ・サン・ガロがこの形式をとり、フリードマ
ドン・デッレ・カルチエリで模倣した。柱廊支間はきわ
めて優美であり、円柱に支えられた平らな内庭は中央で
主アーチならびに軸を施された格間のついた内庭で中断
されている(この柱廊支間がとくにフントワー・ウィー
ニにドストリアのミルタの柱廊支間のモチーフをきえた。
デッラ・ロッビアの浮彫りは別としてこの建築物はなお
りにされ未完だが、十五世紀の最も純粋な響きの一つ
としてつねに生き続けて行くことだろう。「パッツィ家
が、たゞの本を所蔵しているの内部装飾は困難である。
ピアツツ・カルチエリが、この内部装飾の「聖地」から

1853年、ヤーコブ・ブルクハルトは、学制改革のためにパーゼルでの地位を失ったが、この出来事には生涯苦しみ続けた。いまや彼は筆で生計を立てざるをえなくなった。彼に浮かんだ考えは、新たな種類のイタリア旅行案内書を書くというものであった。こうして彼の次のイタリア旅行中に、『チチェローネ、イタリア美術作品鑑賞への手引き』ができ上がった。すでに自著の『コンスタンティヌス大帝』については、彼はヴィルヘルム・ヘンツェン宛の書簡のなかで次のように書いていた(1853年11月7日づけ)。「思ってもみて下さい、この書物を書き出す前から、学者はこれを認めてくれないことが私にはわかっていたのです。」この点はしかし、教条とは無縁な仕方です。イタリア美術を具体的に説明した『チチェローネ』にこそ一層よく当てはまるのである。ヤーコブ・ブルクハルトは本書の成立についてはこう述べている。「本書の四分の三は旅行中に書き上げたが、それはごくわずかしかなかった鉄道と不十分な旅行案内書しかなく、一枚の写真すらない時代のことであった。著者はのちに当時の旅行の恵みについてしばしば語ったが、それはメモ帳を手にして記念的作品の前に立ち、建築正面や個々の彫刻の部分、絵画の構成をスケッチし、いたるところで、おまへはこれをまもなく二度と見ることができなくなるんだぞと自分に言い聞かせねばならぬものであった。」この意味でもブルクハルトのものの見方は、同時代のイギリス人ジョン・ラスキンのそれと類似するのである。ヤーコブ・ブルクハルトの弟子で友人だったフリードリヒ・ニーチェは、『チチェローネ』についてこう語った。「これほど想像力を刺激し、美術的着想への直接的な準備となる書物は少ない」と。実際これほどまでに非正統的に、これほどまでにいきいきと、またあらゆる学問的自負心からこれほどまでに自由に書かれた美術史上の基準となる著作はほとんどない。一年にわたるイタリア旅行の間、ブルクハルトは午前中は美術作品の鑑賞にあて、午後はそこから得た印象を直ちに書き下ろして清書するのを自らの原則とした。

本書の特色

- イタリア美術史研究の基本文献でありながら、今まで一部の翻訳しかなかったブルクハルトの名著、待望の訳行。「絵画篇」「彫刻篇」の翻訳を企画し三部作の完結を目指す。
- 原著『チチェローネ』にはなかった写真図版を554点の挿図、17点のカラー口絵で紹介する、イタリア建築図典とも言うべき書。
- 「建築篇」において著者が言及する建築物・装飾物は一千点に及ぶが、訳者は7年間の歳月をかけ、十数度におよぶ現地踏査をへて、訳文に推敲を加えた。

関連書物

古代美術史

J・J・ヴィンケルマン著
中山典夫訳

2001年10月刊

美術様式の発見者として近代美術史学の創始者とされ、その様式論は古代美術史学だけでなく、以後の西洋美術史、そして日本美術史研究の基礎概念としてますます重要性を増している。古代ギリシアを理想とし、至高の規範とした彼の古典主義は、今日再び西欧に於ける人間涵養の核として見直されつつある。膨大な古代文献の知識と、洗練された視覚による金字塔である。

B5判上製函入 本文500頁 挿図35点



定価34,650円
(本体33,000円)
ISBN4-8055-0390-4
《重版出来》

ルネサンスとバロック

H・ヴェルフリン著
上松佑二訳

1993年10月刊

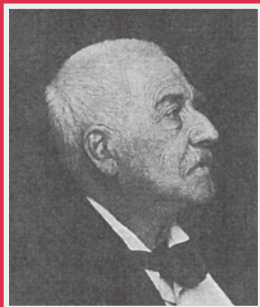
イタリア・ルネサンスからバロックへの様式変遷を、建築家のフォルムにおける形式分析を通して様式の基礎概念の分析へと至るヴェルフリンの生涯に亘る学問的テーマのすべてを包含した古典的名著である。テキストの翻訳に加えて600項目に及ぶ訳註と記述のある全ての参考図を原著にはないものも含め、238点収録したバロックの美学・図像学的建築事典でもある。

B5判上製函入 本文332頁 口絵16頁
参考図版238点



ローマ、サン・ピエトロ広場

定価20,388円
(本体19,417円)
ISBN4-8055-0214-2



著者略歴

ヤーコプ・ブルクハルト (Jacob christoph Burckhardt)

1818.5.25-97.8.8 美術史家、文化史家。
 バーゼルに生れ、同地で歿。バーゼル大学教授(1858-93)。その著 Die Kultur der Renaissance in Italien, 1860(柴田治三郎訳『イタリア・ルネサンスの文化』)はことに名高いが、Geschichte der Renaissance in Italien, 1867(イタリア・ルネサンス〔建築〕史)は事項別の概説に文献的な裏付けを与え、ともに近代美術史学の基礎を確立した名著である。その宏大な博識は地味な人柄と真摯な美術愛好心に支えられ"ルネサンスの大司祭"の名を得た。ヴェルフリンの師で、両者の往復書簡集がある。ほかに Erinnerungen aus Rubens, 1898(浅井真男訳『ルーベンス回想』)、また文化史家としては Die Zeit Konstantins des Großen, 1853(コーンスタンティヌス大帝の時代)、Griechische Kulturgeschichte, 1898-1902(新関良三訳『ギリシア文化史』)等がある。ニーチェにも大きな影響を与えた。

訳者略歴

瀧内横雄(たきうち・まきお)

東京大学文学部ドイツ文学科昭和34年卒業。東京大学大学院昭和36年修了。愛媛大学、國學院大学、筑波大学、聖心女子大学、埼玉大学で独語・独文学、ドイツ思想を教授。専攻はドイツ思想、とくにヤーコプ・ブルクハルト。[主要著訳書]カール・レーヴィット『ヤーコプ・ブルクハルト—歴史のなかの人間』(筑摩書房)、ローマン・インガルデン『文学的芸術作品』(勁草書房)、ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』他(集英社)

ヤーコプ・ブルクハルトが近代ドイツが生んだ最高の知性であり、かつまたもっとも美しい感性の持ち主であることは、大方の識者の認めるところであろう。ブルクハルトの主著と言われる著作のうち『イタリア・ルネサンスの文化』『世界史的考察』『ギリシア文化史』などの邦訳はすでに複数出版されていて、わが国の知識人にも容易に近づきうるものになっているが、『チチェローネ』の翻訳は今日に至るまで未刊である。『チチェローネ』はブルクハルトの美的教養、美意識を知る上で不可欠の著作であり、本翻訳はわが国のブルクハルト理解のこの空白を埋めんとするものである。また本書はイタリア美術を古代からバロック時代に至るまで時代別・都市別に詳細に紹介、論述したものであり、イタリア美術史研究にとっても不可欠の著作である。

B5判 上製函入

本文592頁 挿図554点 口絵12頁17点

定価 39,900円(本体38,000円)

ISBN4-8055-0424-2 C3052



お取り扱いは

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋 2-8-7

電話 03 (3561) 5993 FAX 03 (3561) 5834